

# 第五回英語スピーチコンテスト報告

外国語学部 英語英文学科2年 今村 豊

**平** 成十七年十一月十二日(土)午後、神奈川県大学の三号館地下演習室において第五回英語スピーチコンテストが行われました。この催しは英語英文学科の主催と人文学会の協賛により行われ、事前の選考によって厳選された十二名の出場者が英語を用いて、思い思いのテーマを演説するといったものです。

午前中のプログラムで出場者はスピーチを行い、午後には審査員達による結果発表と、神田外語大学助教授である、青沼智先生によるレクチャー(総評)が行われました。三名の審査員によって、一位から三位までの受賞者が決められ、観客達のアンケートの集計から、オーディエンス賞が決められます。ちなみに、この日の来場者は二百八十名ほどでした。

午前、午後ともプログラムを終えて振り返ってみるに、この第五回スピーチコンテストは成功

だったのだろっと思いましたが、コンテスト自体の進行も二名の司会者によって滞ることなくスムーズに運ばれました。スピーカ(演説者)の思いはそれぞれあれど、スピーチを語りきったという点では、紛う方無い成功だったのだでしょう。それも事前の綿密な計画があったからに他なりません。

そして、今回のスピーチコンテストを作り上げたのはそれに携わった人々です。

出場者や舞台照明、音響、進行等を行ったスタッフがこのコンテストを成功させたのは紛れもない事実です。しかし、それだけではありません。もう一つこのコンテストが唯一無二になりえた要因があるのです。ではその要因とは何か。端的に述べるならば、情報社会の進化です。果たしてこれがどという意味であるかは、後述するとします。は、どんなスピーチが行われたのかを



スピーチだけをかいて、自分で紹介します。

留学先で出会うた先生方に刺激を受けて、彼女も教師を目指すそうと心に決めます。このスピーカーの場合、目指すものが生まれたのはスピーカー自身の勇気のおかげだと思います。夢のはつきりしなかった自分を変えるために、アメリカへと渡るその勇気こそが、彼女をして将来への力強い決心をさせる原動力となったのだでしょう。

更に、十二人目の伊藤さんも自分のやりたい仕事を見つける事の重要さを説いています。彼女の場合もやはり教師になることを自分の夢として挙げます。それから、自分のやりたい事を見つけるにはどうしたら良いかという事を話します。先ほどの田中さんは自分の行動をもって夢を抱くに至りましたが、伊藤さんのスピーチは思い切って行動する前に、自分のやりたい事はつきりさせるための方法を教えてくれます。彼女は、自分が何をしたいのか、何が好きなのか、ということをはたすら見つめ直し、考えるべきだ、と言います。そうして見えてきた目標が日常生活を生きる上でとても大切なことなのだと主張しました。

ちなみに、この「生き甲斐と日常生活」という

スピーチのプログラム表

順番	出場者名	スピーチのタイトル	概要
1	池田 季穂	Taking the First Step Toward My Dream	教師になるという夢について
2	筒井 紘治	Add Some Oil or Your System Will Break Down	医療における患者の知識について
3	鈴木 麻衣	Freezing Hot Summer 2005	室内の冷房が効き過ぎている事について
4	橋本 直哉	My Five Years to Graduate	意義ある五年間で大学を卒業する事について
5	豊田 櫻子	The Worst Violence that Damages Self-Worth	親しい間柄で起こる暴力について
6	細井 圭介	No Will, No life	目的のある生活について
7	星 薫	Give Money to Beggars or Not	インドの物乞いへの施しについて
8	高橋ひろみ	My New Father	父の変化に伴う自分の変化について
9	福田 佑季	Do Not Throw Away the Opportunity to Study Abroad	海外で学ぶ事の意義について
10	田中 彩	My Dream	教師になるという夢について
11	村上 優貴	Racism is Everywhere	人種差別の現状について
12	伊藤有香里	Let's Open the Door to Our Future	自分のやりたい仕事を見つける事について

一人目の池田さんのスピーチは概要にあるように、本人の目指す教師という職業に就くための、教育実習の体験を語ったものですが、このスピーチにおいて最も強調されているのはやはりスピーカーの持つ、教師になろうとするこへの意志でしょう。初めは実習で受け持ったクラスが生徒達と思っように理解しあえなかつたり、授業の段取りを間違えたり、といった失敗を語ります。しかしやがて、挨拶を通して生徒と親しくなっていくことができたのです。この経験によって、スピーカーは授業の方法を学ぶだけでなく、子供達とのコミュニケーションの方法も学ぶことができたと言っています。そしてそこで、改めてスピーカーは教師になりたいと語ります。様々な紆余曲折の体験を経て、再び固まる夢への決意は、スピーチを聴いていた人々にも充分に伝わったと思います。

また、同様に十人目のスピーカーである田中さんも教師になるといっ夢を語ります。中学校の時は自分のやりたいことや、将来への展望が曖昧だったスピーカーは、高校へ入学してから、思い切ってアメリカへの留学を試みたのです。そして

テーマは六人目のスピーチである細井君のスピーチのテーマにも通底するものです。細井君は奄美大島で休暇を過ごしていた時、当初はとても居心地良く感じていたそうです。しかし、やがてその生活に飽き始めている自分に気づきます。その生活には目的が存在しなかったからです。結局、スピーカーは横浜での生活の方が自分のやりたい事を持って生きている分、有意義だと考えたのです。ですから細井君のスピーチのタイトルは「生活には意志や目的が必要だ」ということを意味しているのです。

このように、将来の夢や自らのやりたい仕事などをテーマにしたスピーチがある一方、別のパターンがあります。そのパターンとは、社会の様相や問題を捉えてそれを観客に訴え、理解を求めるものです。

例えば五人目のスピーカーである豊田さんは、とある女性が交際相手から暴力行為を受けているのを偶然目撃したことを契機に、親しい間柄で行われる暴力は周囲には認識されにくいと主張します。何故なら暴力行為を受けながらも、加害者を責めきれないばかりに、周囲へ相談すること躊躇ってしまうからです。そしてスピーチ

ーチは、そのような躊躇が、結果的に加害者は勿論、被害者自身の価値を蔑むことにもなりかねない、と主張するのです。

このスピーチは、一見すると何事も問題無いような関係でも、暴力行為や傷害行為が存在する可能性のある事を意味しています。それはとりもなおさず、社会に散在する病理を訴えたものであり、暴力行為に対する普段の認識が如何に脆いかを指摘しているとも言えます。

二つした社会の問題と認識を取り扱ったテーマのスピーチは他にもあります。

七人目の星さんのスピーチはインドへ訪れた際に目の当たりにした、物乞いの人々の現状について語った内容です。インドでは頻繁に目にするという物乞いの人々に対して、要求通りにお金を渡すべきなのかという問いかけがそこには含まれています。そしてスピーカーが出した結論は、物乞いの人々に施しをするべきではないという事でした。例えばお金をあげたとしても、その時は良いかも知れませんが、それが物乞いの原因である貧困を根本的に解決する訳ではないからです。二つした一過的な行為によつて貧困を解決するのではなく、もっと大きな視野が必

どこかで同じように感じてくれるからです。そもそも、スピーカーは客観的に問題を見つめています。そして同様に、受け手も客観的に問題を見つめる視点を容易に共有できるので、一般的な印象を与えます。

しかしながら、こちらのタイプにも難点があります。一般化した問題は共感を得やすい反面、結論や論旨の如何によつては凡庸でありきたりな印象を与えかねない危険性があるのです。受け手の共感を得るような身近な例から社会問題へと話を広げたとしても、その考察から結論に至るまでが、ありふれた方法では恐らく受け手も聴く気を失ってしまうでしょう。それを回避するためには、少しでも興味を引くような少し変わった論を織り交ぜなければならぬのです。勿論、これは奇を衒えという意味ではありません。ただ、どんなにありふれた題材を取りあげても、スピーカーが独自に考えた結論や主張が的確にスピーチに入っていないければならないという事です。つまり、このタイプのスピーチの難しさはここにあるのです。社会問題自体、とても規模の大きい話ですから、それをじっくり考えて、自分なりの結論を出すには多くの時間を

要なのです。そこでスピーカーが提示したのは、インドという国そのものを周囲の国家の援助によつて助けていくという方法でした。そしてその為には周囲の国や人々がインドの貧困の事実とその実態を認識することから始まる、とスピーチは言います。

やはりこの場合も、社会に包含される問題の認識を訴えかけるような論調であり、先ほど挙げた、自らの夢や希望を語るスピーチとは一線を画しています。自分の経験を元にして、その問題が社会とどのように関係し、どのように現れているかを伝えるのが、もう一方のスピーチの傾向です。十一人目のスピーカーである村上君の人種差別を取り扱ったスピーチも、やはり「ヨーロッパでの留学体験を元にして、現地で感じた人種差別的な態度が日本でもやはり見られ、世界の至るところで見られる」という主張をします。

以上のように、十二人のスピーチの中からいくつかの特徴的なものだけを抜き出して取りあげてみましたが、紹介されなかったスピーチも、これら二つの傾向に大別することが出来ます。

先に挙げた、自分の将来の展望や、やりたい仕

事等について語るスピーチは、全体的に主観を元にして構成されており、それ故に結論や自分の意見を具体的に伝えることが出来ます。あくまでも自分の事を他者に伝えるので、自分の伝えたい事が何なのかさえ明確ならば、自分の体験の記憶等を加えて行くことで、より説得力を持たせることができます。

しかしこのタイプのスピーチの難しさは、如何に聴き手に共感してもらえるかでしょう。自分の事について語るのであれば、自分の気持ちや経験を、受け手にもできるだけ同じように感じ取ってもらう必要があります。そうして共感できる伝え方をしないと、受け手はスピーチ内容をただの他人事だと見なししまい、それ以上の理解を止めてしまう可能性があるからです。ですから聴き手にも解りやすいような具体例を挙げたり、できるだけ共感を覚えるような言葉を用いて話したりしないと、一方的に語るだけで聴衆の注意を引くには至らないのです。

対して、社会の問題を扱うスピーチは共感と二つ点では先述のタイプよりも有利です。何故なら社会問題の身近な部分を挙げさえすれば、それが社会に根付くものである以上、受け手も

必要とするでしょう。自分の夢を語る場合はあくまでも主張の源が自分にあるため、それを言葉にして引き出すのは比較的容易ですが、客体



さて、二つのスピーチを完成させるにはどれだけの努力が必要かという事を少し説明してみました。しかも二つして推敲を繰り返してでき

あがつた原稿を今度は暗記しなければならず、更にはどついたジェスチャーを盛り込むかという事や、どついたりリズムで言葉を紡ぐべきかという事を考えなければなりません。ほんの数字のスピーチの中にはこれほど多くの労力がつき込まれています。

こうしてできあがつた数々のスピーチが今回、二通りの傾向に大別される事実については今述べてきた通りです。ではこれらの傾向を概観することによって見えてくる様相とは何でしょうが。

それはこの社会の情報伝達手段の多様化です。ご存知の通り、IT革命以降発達してきた情報化社会は今もなお止まることなく成長しています。即物的な影響はインターネットの普及にみるように、比較的早く現れました。そして今、その二次的な影響が現れています。つまり、一見無関係に思えるスピーチコンテスト等の間接的な物事にも影響が現れているのです。今回の傾向の根幹はそこにあります。海外での体験を元にしたスピーチや、世間の出来事を題材としたスピーチが可能になつたのは、極論すれば情報化社会の恩恵です。自分の夢に関わる情報も、

国際情勢の情報も、今では容易く入手が可能です。今までは知ることでもできなかった有益な情報を、簡単に知ることができるようになつたのです。結果、自分の将来の夢を実現するために役立てたり、視野を広げるために役立てたりできるよつになりました。それが現象としてこのスピーチコンテストに現れたのではないかと僕は思います。

しかし、そうした情報化の影響だけで今回のスピーチが構成されているとも思いません。確かにあらゆる情報を少ない労力で集められるよつになり、そうやって手に入れた情報が元となつてスピーチの動機を形成することはあるかもしれませんが、けれど結局それらの情報を如何に受け取り如何に解釈するかは、情報を手に入れた本人次第なのです。情報を手に入れた先からは、自分で話を組み立てなければならず、また、苦勞して組み立てた話を声に出して語るのも本人なのです。その意味で言えば、間違いなく今回のスピーチコンテストを完成させる背景にあつたのが、情報化社会という抽象的なものであつたとしても、それを形にしたのは紛れもなく具体的なスピーカー達出場者であり、それらを準備

し、実現したたくさんのスタッフの人々だと思えます。彼らがいなければ、今回のようなスピーチコンテストにはならなかつたでしょう。つまり、スピーチコンテストとは唯一無二の創造そのものなのです。少なくとも僕にはそうとれました。

例え情報化社会が進み、個人が情報の波に途方に暮れるよつな環境ができあがつたとしても、人は決してその波に飲まれることを許さないでしょう。彼らが創造を望む限りにおいては。

以上で第五回スピーチコンテストの報告を終わります。わざわざ最後まで読んでいただきどうもありがとうございます。次回のスピーチコンテストには是非、足を運んでみては如何でしょうか。

スピーチ内容等の確認をとらせて頂いた師岡先生、助かりました、ありがとうございます。

写真撮影日 平成十七年十一月十二日、

神奈川県 二子館地下

演習室にて

写真提供元

神奈川県 英語英文学科

専任講師 師岡 淳也